

新教育における心身論と教育愛の連関

— オーデンヴァルト学校設立 100 周年に寄せて —

伊藤 敏子

Mind-Body Theories and Pedagogical Love in New Education — On the Centenary of Odenwaldschule —

Toshiko ITO

Abstract

Odenwaldschule, a German Landerziehungsheim established on 14 April 1910, was expected to look back on a century of great achievement in 2010. However, with the commemorative ceremonies close at hand, dozens of its former students stood up to expose sexual abuse committed by their former teachers. Some theorists of education reject the idea of sexual abuse as an accidental phenomenon and describe it as a consequence of a particular boarding style based on the theory of pedagogical love. In this view, the family system of the boarding school is bound to be rife with abuse since Eros as pedagogical love, a popular concept in the 1920s, when many Landerziehungsheim schools were prospering, tends to facilitate the discredited Ancient Greek custom of pederasty. Yet Paul Geheeb, the founder of Odenwaldschule, went to great lengths preventing such abuse during his lifetime, in marked contrast to founders of other Landerziehungsheim schools such as Gustav Wyneken. An examination of Geheeb's letters suggests that abuse at Odenwaldschule may have been encouraged by anti-Platonic mind-body theories rather than the Platonic ideal of pedagogical love.

1. はじめに：100 年間の総括

2010 年はオーデンヴァルト学校 (Odenwaldschule) にとって 100 年にわたり積み重ねてきた偉業を振り返る輝かしい節目の年となるはずであった。ドイツ新教育運動の軸をなすドイツ田園教育舎運動を牽引した三大巨星¹の一人であるゲヘーブ (Paul Geheeb, 1870-1961) によって 1910 年 4 月 14 日に設立されたオーデンヴァルト学校は、20 世紀初頭のウィルヘルム時代から 21 世紀初頭のグローバル時代にいたるまで、教育関係者のあいだでは理想の学校の象徴として君臨し続けてきた。しかし、オーデンヴァルト学校設立 100 周年記念祭を目前にひかえた 2010 年 3 月から相次いだ「オーデンヴァルト学校で過去に生じた暴行の公表」は、100 年の歴史において振り返るべき対象を必然的にその負の側面へと転じることになる。

オーデンヴァルト学校の負の側面を総括する端緒として注視されるのは、暴行という事実を偶然オーデンヴァルト学校に生じた不幸な事件とみなすのか、あるいはオーデンヴァルト学校のシステムそのも

¹ イギリスのレディ (Cecil Reddie, 1858-1932) のアボツホルム校 (Abbotsholme) を手本にドイツで最初の田園教育舎を設立したリーツ (Hermann Lietz, 1868-1919)、リーツのもとで教鞭をとり後に独自の田園教育舎を設立したヴィネケン (Gustav Wyneken, 1875-1964) とゲヘーブの三者はドイツ田園教育舎運動の旗手と目されている。

のに暴行を生み出す素地があったとみなすのか、という観点である。教育関係者の多くは後者の見解に立つ。ドイツ田園教育舎の代表格であるオーデンヴァルト学校にシステム上の欠陥があるとすれば、それはドイツにおいて一時代を超えて賞賛を受けてきた一新教育の代名詞ともいえるドイツ田園教育舎そのものにシステム上の欠陥が存在することになる。システム上の欠陥とは具体的には何を指すのか。そしてその欠陥はドイツ田園教育舎の設立者の意図とどう関わっていたのか。さらにドイツ田園教育舎はこのシステム上の欠陥を今どのように克服しうるのであるのか。本稿はオーデンヴァルト学校設立100年目の議論において核心をなす教育愛の概念がゲヘーブの教育構想のなかにどのように位置づけられていたかを心身論を絡めながら検証し、それが今日における教育の文脈のなかでどのように変容することが求められているかを考察する試論である。

2. オーデンヴァルト学校の問題性の所在

オーデンヴァルト学校において起こった暴行についてはこれまでに十数名の加害者と七十数名の被害者が明らかとなっているが (vgl. Bartsch / Verbeet 2010, 40)、負の側面を振り返るなかで浮上してきたのは一オーデンヴァルト学校の独自性をひときわ際立たせている一疑似家族を形成して営まれる寄宿生活そのものに暴行の発生の原因および暴行の隠蔽の原因が内包されているのではないかという疑念である。寄宿学校を構成する成員は、学びの共同体に所属すると同時に家族のように寝食をともにする生活の共同体のなかに組み入れられる。これは一面的な知識伝授に傾きがちな一般の学校のシステムと対置され、全人教育という新しい教育のスタイルを可能にするものとして高く評価されてきたシステムである。

寄宿学校内の共同体において成立する教師と生徒のあいだの距離の特異性を問題視するのは、新教育研究を専門とする元ウルム大学教授ヘルマン (Ulrich Herrmann) である。教師と生徒のあいだに横たわる距離はあまり大きすぎると無関心や拒絶に陥ることになり、逆にあまり小さすぎると相互の依存を限りなく増大させてしまうので、寄宿学校を構成する成員はそのどちらにも傾かない適度な距離を保つという困難に向き合うことが恒常的に求められることになる (vgl. Herrmann 2010, 9)²。

1972年から1974年までオーデンヴァルト学校の教師であったブエブ (Bernhard Bueb) は、オーデンヴァルト学校では宿舎で生徒の親代りをつとめる教師の役割が一教師と生徒のあいだの距離の取り方を含み一すべて個々の教師の裁量に委ねられていることに戸惑いを覚え、秩序の欠如に悩まされたと告白している (vgl. Bueb 2010)。一方、理想化された新教育を相対化する新解釈で注目された³ チューリッヒ大学教授エルカース (Jürgen Oelkers) は、ドイツ田園教育舎の基本的特徴として、親元からも街からも離れて営まれる閉じられた学習共同体即生活共同体のなかで教師と生徒のあいだには強い感情的依存が惹起され、教師と生徒のあいだの異常な近さは生徒からあらゆる自由を剥奪してしまうという一すでに敬虔主義の共同体にみられたような一好ましくない状況が現れがちであることを示す (vgl. Oelkers 2010)⁴。すなわち、エルカースによれば、ドイツ田園教育舎はその構造上、教師と生徒のあいだの距離

² ローテン (Michèle Roten) もまた空間的な距離および感情的な距離を教師と生徒のあいだにどのように適切なかたちで設定するかを今後の最大の課題とみなす論客のひとりである (vgl. Roten 2010)。

³ エルカースが1989年に上梓した『新教育一批判的ドグマ史一 (Reformpädagogik. Eine kritische Dogmengeschichte)』はこの新しい解釈によって大きな反響を呼ぶ。

⁴ ゲッティンゲン大学で生物学を講ずるフィッシャー (Julia Fischer) も、1978年から1984年のあいだオーデンヴァルト学校に学んだみずからの経験にもとづき、暴行を排除する前提としてまず生徒たちを現在おかれている「両親からも社会からも隔離された孤立状況」から脱却させることの必要性を説いている (vgl. Fischer 2010)。

を調整する余地をそもそも持ち合わせず、絶対的な近さへと収斂されることを運命とするのである。

教師と生徒のあいだの距離という問題をより複雑にするのは、オーデンヴァルト学校を含むドイツ田園教育舎が1920年代の生活改革運動と連動して支持していたエロスという概念である。エロスを教育構想に取り込む提案は古代ギリシアの思想家プラトン（Platon, ca. 428–347 B.C.）に遡る。アカデメイアを創立したプラトンはその指導精神として愛＝エロスを掲げ、みずからの学園の構内に愛の神エロスの像を設置する。エロスとは「何かに対して、次には現に欠乏を感じているものに対して、存在する」（プラトン 2002, 101）こと、そして「美に対して存在する」（同書 102）ことを確認したうえで、プラトンは、人間がこのエロスに導かれるように「一つの美しい肉体から二つのへ、二つのからあらゆる美しき肉体へ、美しき肉体から美しき職業活動へ、次には美しき職業活動から美しき学問へと進み、さらにそれらの学問から出発してついにはかの美そのものの学問に外ならぬ学問に到達して、結局美の本質を認識するまでになる」（同書 126）⁵と段階的に進展する教育の構想を描きだす。この構想にあってエロスは教育の原動力として機能するのであり、エロス無くして教育は成立しえない。

寄宿学校研究の権威である⁶ボン大学教授ラデンティン（Volker Ladenthin）は、1909年にゲヘープがヘッセン・ダルムシュタット大公国文化省宛てに認めた書簡を手掛かりとして、ゲヘープにおける教育的エロスの理解について分析を行っている。この書簡のなかで、オーデンヴァルト学校の開設に向けた準備期にあったゲヘープは、現行の教育システムにおける問題を指摘し、この問題の解消にみずからの提案する新しい教育システムがいかに関与するかを熱く語る。具体的には、教育施設に発生する暴行を明確に悪として認識し、その原因を「当時の学校に支配的であった」男女別学という不自然な教育環境に帰し、間もなく設立予定のオーデンヴァルト学校が提供する男女共学という自然な教育環境によって根絶されうるものであると結論づける（vgl. Ladenthin 2010, 3）。この文脈に従えば、男女共学として設立されたオーデンヴァルト学校は「今回の一連の暴行の素地として断罪された類の」教育的エロスとは無縁なものともみなされることになる。

ゲヘープは当時横行していた暴行を終息させるという期待をもって男女共学の教育施設を創設したのであり、みずからの教育施設においては友情と性欲が厳密に区別されるべきことを唱える。エルカースはしかしながらこれを「厄介で無謀な企て」（Oelkers 2010, 14）であったと総括する。その根拠としてエルカースが提示するのは、オーデンヴァルト学校が設立されて間もない1912年には生徒の父親から暴行への非難がなされ、1924年には生徒の母親から同様の苦情がゲヘープに寄せられながら、いずれもこれといった対応がとられることなく放置されていたという事実である。1930年には元オーデンヴァルト学校教師が新たな赴任先で加害者として逮捕されたことを受けて「念のためにオーデンヴァルト学校でも対策を」という声が保護者たちからあがったときでさえも、ゲヘープは同僚への信頼を前面に掲げ無為に徹している（vgl. ebd., 14 ff.）。

ゲヘープが暴行への対応策に積極的ではなかったことの背景としてエルカースが目にするのは1920年代のドイツ田園教育舎に浸透していたギリシア的エロスの賛美という現象である⁷。この影響を特に

⁵ この文脈においては、プラトン自身が『法律』において明言するように「少年愛を反自然的悪習として退けていることに留意しなければならない」（プラトン 2002, 16 参照）。

⁶ ラデンティンは2004年には『寄宿学校 — 課題・期待・批判 — (Das Internat. Aufgaben, Erwartungen und Kritiken)』、2009年には『寄宿学校 — 構造と未来 — (Das Internat. Struktur und Zukunft)』をいずれもフィツェク（Herbert Fitzek）とライ（Michael Ley）との共著として上梓している。

⁷ オーデンヴァルト学校の現校長であるカウフマン（Margarita Kaufmann）の依頼を受けて所見を作成した心理学者シュヴァートル（Walter Schwertl）もこの解釈を支持し、オーデンヴァルト学校における暴行は「少年愛を含む」古代ギリシアを称える文化プログラムのひとつの表出であると結論づけている（vgl. Schultz 2010）。

強く受けていたのは、ゲヘープにとってハウビンダ校での同僚でありヴィッカーズドルフ自由学校共同体 (Freie Schulgemeinde Wickersdorf) では共同経営者でもあったヴィネケンである。ヴィネケンは大きな反響を呼んだその著書『エロス (Eros)』(1921) のなかで一少年愛を擁護しつつ「プラトンのエロス」を真の教育の基礎として様式化している (vgl. Oelkers 2010 a, 18)。

オーデンヴァルト学校自体に目を転じると、1918年から1935年にかけてオーデンヴァルト学校でギリシア語・ラテン語・歴史を教えていたキーファー (Otto Kiefer, 1876–1943?) が、当初はソクラテス (Sokrates, ca. 470–399 B. C.) を、後にはゲオルゲ (Stefan George, 1868–1933) を軸として少年愛をテーマとする著作活動を展開していた。キーファーはプラトンの少年愛が性愛とは一線を画するものであることを確認したうえで、性的でないエロスが「教育の基礎をなすこと」、「真に近代的教育施設の必要な要請であること」、「田園教育舎を満たしていること」⁸ を述べ、危険なのはむしろ教育活動が十分にエロスで満たされていないケースであると断言する (vgl. Oelkers 2010 a, 5)。ここに、プラトンに発する教育的エロスを崇拜する時代思潮がオーデンヴァルト学校にも波及していたことが確認されるのであるが、それがゲヘープ自身の教育理念および教育実践のなかに組み込まれていたかどうかについては精査が必要となる。

3. ゲヘープの教育理念

ゲヘープは、1892年にイエナ大学で開講されたリプシウス (Richard Adalbert Lipsius, 1830–92) の宗教哲学演習で出会い、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762–1814) の教育理念を実現するという志で意気投合したリーツに請われ、フィヒテの教育理念を反映してリーツが設立した田園教育舎のひとつハウビンダ校 (Haubinda) で1902年から教鞭をとることになる⁹。リーツから離反したゲヘープは1906年、同様にリーツから離反した元同僚ヴィネケンとともに新しい田園教育舎ヴィッカーズドルフ自由学校共同体を設立するが、やがて共同経営者であるヴィネケンからも離反し、1910年には妻エディット (Edith Geheeb-Cassirer, 1885–1982) とともに新しい田園教育舎オーデンヴァルト学校を設立、国家社会主義に染まるドイツから逃れて移住したスイスではみずからの手になる最後の田園教育舎エコール・デュマニテ (Ecole d'Humanité) を設立する。

ゲヘープのライフワークとなる一連の教育活動は、ドイツにおける新教育運動の嚆矢となるドイツ田園教育舎運動のなかに位置づけられる。19世紀末、リーツによって興されたこの運動は、「都市 (Stadt)」から遠く離れた「田園 (Land)」に知育に特化された「授業 (Unterricht)」ではなく全人的発達を目指す「教育 (Erziehung)」を提供する—「学校 (Schule)」に對置される—寄宿「舎 (Heim)」を理想として掲げる教育運動である。19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツ全土に設立された多くのドイツ田園教育舎が共通して唱える目標は「性格形成 (Charakterbildung)」であり、リーツのもとではこの目標にかんがみて「カペレン (Kapellen)」と呼ばれる教育実践が重視された。「カペレン」の名称のもとに具体的に展開された活動は、「毎日の朝夕の礼拝、(森での、星空の下での遠足といった)

⁸ キーファーは1924年、『エロスと田園教育舎 (Der Eros und die Landerziehungsheime)』という論考を執筆している (vgl. Oelkers 2010 b, 2)。

⁹ リーツはすでに1898年にドイツ最初の田園教育舎となるイルゼンブルク校 (Ilsenburg) を初級教育施設として設立している。ゲヘープが教鞭をとったハウビンダ校はイルゼンブルク校の卒業生の受け皿として1901年に設立された中級教育施設であり、リーツの手になる二つ目の田園教育舎である。リーツはさらにハウビンダ校の卒業生の受け皿として1904年、上級教育施設であるビーバーシュタイン校 (Bieberstein) を設立している。一連の田園教育舎の通奏低音をなしているのは、フィヒテの掲げる教育理念とリーツ自身が実地に学んだレディのアボツホルム校における教育実践である。

荘重な機会を通じての宗教的発達、記念日の式典、あらゆる授業科目における、とりわけ自然科学・歴史における宗教的倫理的なものの強調、詩歌と芸術の育成」(Lietz 1970, 32)である。

リーツの教育実践は多くの観点においてフィヒテの教育理念を直接に反映させている。たとえば、都市から距離をおくという田園教育舎の立地条件は、フィヒテが『ドイツ国民に告ぐ (Rede an die deutsche Nation)』(1807/1808)の第2講で求めた「俗世間からは全く隔離され、あらゆる接触を断ち」(Fichte 1955, 38)「みずからの共同体を形成して生活する」(ebd., 40)環境と完全に符合している。しかし、ゲヘープはフィヒテにおいて提示された教育理念のひとつがリーツにおいて看過されていることを問題視する。すなわち、フィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』の第10講において強調した「教育が社会から隔離された場で実施されることとならぶ」教育が男女の共存する場で実施されることの重要性がリーツの教育実践では配慮されていないのである (vgl. Geheeb 1913, 117; Geheeb 1931, 140)。「両性を分けて男子校と女子校に入れることは教育の目的に反するものであり、全人に向けられた教育が掲げるいくつかの重要事項を台無しにしてしまう」(Fichte 1955, 169)と考えるフィヒテの教育構想にかんがみるならば、リーツの教育実践は絶対条件をなす両輪のひとつを欠いたシステム上の欠陥を抱えていることになる。ここにゲヘープがリーツのもとを去り新しい田園教育舎の設置へと向かう必然性が生起する。男女共学で目指されるのはしかしながら男女に均質な人間形成ではない。男女共存という自然な教育環境を提供する趣旨は「少年愛といった悪弊を根絶し¹⁰」男女それぞれの特性「男子にあっては「自己抑制と義侠心」、女子にあっては「自己防衛・謙虚・女性らしい品格」」を伸長することにある (vgl. Geheeb 1909, 78; Geheeb 1931, 141)。

4. ゲヘープの教育実践とプラトン：連続と断絶

ゲヘープ自身のなかには時代思潮であった「プラトンのものに代表される」ギリシア文化への傾倒が存在したのだろうか。オーデンヴァルト学校設立の認可を受けるためヘッセン・ダルムシュタット大公国文化省宛てに認められた書簡には、「ギリシア芸術にとどまらずギリシア語も今後の国民エリート¹⁰の陶冶材のなかで適切な位置を占めることができるように試みたい」(Geheeb 1909, 64)というゲヘープのギリシア文化に対する共感が表明されている。オーデンヴァルト学校にはドイツの偉人「ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)、ヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744-1803)、シラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805)、フィヒテ、フンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)」の名をそれぞれに冠した5つの建物を見下ろす位置にプラトンの像が設置されるが、これは汲み尽くされることのない豊かな西洋文化の源流に対するゲヘープの敬意を示すためであった (vgl. Geheeb 1924, 157 & 163; Geheeb 1931, 147)。実際、ゲヘープはみずからの作品の輝かしい頂点をなすものとしてプラトンハウスを念頭においていた。設立間もないオーデンヴァルト学校で1911年に1年間学び、後にミュンヘン大学教授となったグルンスキー (Hans Alfred Grunsky) は、ゲヘープの生誕90歳に刊行された『人間性への教育 (Erziehung zur Humanität)』(1960)のなかで、ゲヘープにあっては「教育的エロスに内包される〈神に対する想像〉に満たされてあることが純粹にプラトンのであった」(Grunsky 1960, 49)と回想している。

こういったプラトンへの敬意にもかかわらず、ゲヘープの教育構想がその心身論においてむしろ反プラトンの特徴をもつということは注視に値する。

プラトンによれば、魂の現世における滞在先である身体は神性からの離反の帰結として「物理的に

¹⁰ さらに、ゲヘープは共同体をつなぐ友情は性欲とは一線を画すると明記している (vgl. Geheeb 1913, 120)。

生成された「死すべきものであり、神との類似性の象徴として」形而上学的に存在する「永遠なものである魂」に対置される。「魂としての人間にとっての唯一の脅威は、身体としての人間である」(König 1989, 27) と考えるプラトンは、魂と身体という区分を無化する「陶醉の」領域を生業とする者「詩人と舞踊家」を国から追放することを求めている(三浦 1999, 10 参照)。魂と身体を二分して把握するプラトンの人間観は「たとえば、「わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下(もと)に売られているのである。〔中略〕わたしの肢体(したい)は別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る」(Rom.7, 13-23) という聖書の一節に代表されるように「キリスト教の人間観にも継承されている。心身の二項対立図式を根幹とするこの人間観は、ヨーロッパ世界における教育理念および教育実践を長く規定していくことになる。

心と身体の二分法的枠組みを前提とする「心を脅かす身体」という心身図式を克服し、心と身体を有機的な全体とみなす教育構想は新教育運動の時代、すなわち 19 世紀から 20 世紀にかけての世紀転換期を待たなければならなかった。その推進力となったのは、ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) が『ツァラトストラはかく語りき (Also sprach Zarathustra)』(1883-85) のなかで「わたしはまったき肉体であり、それ以外のなにもものでもない。魂とは肉体に属するものを言い表す言葉に過ぎない」(Nietzsche 1968, 35) ということばで鮮烈に宣言した、心身を分割させることなくまるごとの生命として肉体を把握する立場である。ここに身体は心の本質を阻害するものとしてではなく心をも包摂する生命を体現するものであるという新たな性状を付与される。この心身論こそが、プラトンが警戒した「心身の境界線を無化する」教育理念および教育実践を新しい時代の本流として広く認知させていく基盤となるのである。

ゲハーブが依拠したフィヒテの心身論は、プラトンのそれではなくむしろニーチェのそれに近似していた。フィヒテは『ドイツ国民に告ぐ』のなかで何度もペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) の教育論に言及するが、とりわけ「身体能力の発達が必ず精神能力と調和しつつ進展しなければならない」(Fichte 1955, 157) というペスタロッチーの見解を強調している。この身体と精神の発達を一体化させて推進する構想は、「心を脅かす身体」というプラトンの心身論ではなく、ニーチェの提起した身体を「心を内包する」まるごとの生命として理解する心身論の立場に近い¹¹。

ゲハーブは教育実践における心身論を構築するうえでフィヒテの理想主義哲学とならんで心理学および精神医学にも依拠している。ゲハーブは大学において当初「リーツとの出会いがリプシウスの宗教哲学演習であったことからもうかがえるように「聖職者の資格を獲得するために神学を中心とした履修を進めていたが、1893 年から 1894 年にかけてゾフィエンヘーエ (Sophienhöhe) の「精神病質児のための施設」¹² で教育活動に関わったことを契機として科学とりわけ生理心理学への関心を膨らませる。精神病質児の共同体として機能する施設とともに生活しながら教育に従事する体験から受けた強烈な印

¹¹ ちなみにフィヒテの教育の趣旨とするところは、禁欲的な人間形成であった。教育は「官能的享樂をまったく志向しない愛」(Fichte 1955, 38) に導かれるものであり、「私欲の入り込む余地のない」(ebd.) ことが求められる。

¹² 「精神病質児のための施設」はビンスヴァンガー (Otto Binswanger, 1852-1929) の依頼を受けてトリューパー (Johannes Trüper) が 1890 年に設立した施設である。ビンスヴァンガーの父 (Ludwig Binswanger, 1820-80) は自らの家族と患者がともに生活する「治療力のある共同体」として 1857 年にボーデン湖畔のクロイツリンクにベルビュー療養所を設立し、この療養所を三代目として引き継いだビンスヴァンガーの甥 (Ludwig Binswanger, 1881-1966) は、精神分析と実存哲学を結びつけた「現存在分析 (Daseinsanalyse)」を提唱し、いずれも心理学および精神医学の領域に大きな功績をのこしている。なお、スイスに移住したゲハーブはビンスヴァンガーのこの著名な甥にも 1939 年にルツェルンで開催された心理学の講習会で邂逅している (vgl. Näf 2006, 553 f.)。

象は、ゾフィエンハーエの独自の実践を支える、心身の境界線を超えた人間観にたつ科学への関心をゲヘープに呼び覚ませたのである。ゾフィエンハーエを辞した後、ゲヘープは博士論文のための研究よりも生理心理学の勉強を優先させ、とりわけヴント（Wilhelm Max Wundt, 1832–1920）やツィーエン（Theodor Ziehen, 1862–1950）に没頭し始め（vgl. Näf 1998, 151）、イエナ大学に復学して以降もライン（Wilhelm Rein, 1847–1929）の演習を受講するかたわら、臨床医として児童・青年を対象とする精神医学の名声を得ていたビンスヴァンガーの「癩癩とヒステリー」やツィーエンの「脳病理学」を受講し（vgl. ebd., 159）¹³、心理学および精神医学の視点からの心身論を学びとっていく。

理想主義哲学、心理学そして精神医学の知見に支えられた心身論のうえに構想されたオーデンヴァルト学校における教育実践には「起床、森のなかの耐久競争、冷水のシャワー」（Mann 2000, 177）が組み込まれ、午前中の休憩時間にはさらに「空気浴」ないしは「光線浴」— 小高い丘の草地で男女別に全裸で行う徒手体操（vgl. Mann 2000, 177; Venn 2008, 94; Kroner 2008, 160; Gassner 2008, 165）— が実施される。オーデンヴァルト学校で1915年から1919年まで— さらにエコール・デュマニテで1937年から1941年まで— 教鞭をとったヒュグナン（Elisabeth Huguenin, 1885–1970）の「空気浴は— ダンスと同様に— 体育と同時に徳育の観点からも重要である」（Huguenin 1926, 15）という見解に象徴されるように、晴れの日も雨の日も雪の日も行われる裸体のトレーニングには、ひとつには身体を鍛えあらゆる病気を予防するという目的が、いまひとつには心を清浄するという目的が帰せられていた。

この教育実践の背景をなすのはしたがって、心身の境界線を無化するきわめて反プラトンの心身論であるといえる。管見では、オーデンヴァルト学校が陥った「教師と生徒のあいだの距離の限らない短縮」という傾向性に拍車をかけているのは、第一義的にはこの心身論である。教育的エロスという概念はゲヘープにあって副次的な役割しか果たしていない。

5. ゲヘープの周辺における教育愛の理解

ゲヘープはドイツの教育界で大きな発言力をもつ教育学者たちと長年にわたる親交を結んでいた。ゲヘープの理解者において教育愛がどのように扱われていたか、特に教育愛について検討を行っている三者についてその特徴を確認しておきたい。

まずシュプランガー（Eduard Spranger, 1882–1963）は、1920年にベルリンで開催された帝国学校会議でゲヘープと知り合って以降、理想主義という志向性で結ばれその晩年まで交流している¹⁴。シュプランガー自身がオーデンヴァルト学校を訪問したのは1926年の一度だけであるが、ゲヘープはベルリンに出かけるたびにシュプランガーを訪ねている（vgl. Näf 2006, 243）。ゲヘープはシュプランガーに大きな信頼を寄せ、オーデンヴァルト学校がナチスから弾圧を受けたときには、ベルリン大学教授であったシュプランガーに体制側との仲介さえも依頼している（vgl. ebd., 402）。その主著『生の諸形式（Lebensformen）』（1914）において、シュプランガーは教育愛をして— 宗教的な愛やエロスの愛とは区別される— 「他者の魂への献身的な愛」（Spranger 1922, 336）と定義する。教育愛とはひとつには「成長過程にある心およびその未発達の価値可能性」に向けられているが、いまひとつには「教育者がこの可能性の中から生み出そうとしている生命の客観的意義および価値」（ibd., 340）に向けられて

¹³ ツィーエンはビンスヴァンガーがイエナで運営していた精神病院に勤めていた。この精神病院はニーチェを診察したことで有名であるが直接に担当したのはツィーエンであった（vgl. Näf 1998, 151）。

¹⁴ ゲヘープ資料室には1922年から1963までのあいだにゲヘープとシュプランガーが交わした書簡のうち100通ほどが保管されている。

いる。注目されるのは、シュプランガーがプラトンに代表されるエロスの類型の教育者をその「貴族主義的な個性化」ゆえに、またその「曖昧で、きわめて欲求的憧憬的な生の形式」ゆえに、ペスタロッチーに代表される純社会的類型の教育者との対比において低次の教育者とみなしていることである (vgl. ebd., 341)。

次にフリットナー (Wilhelm Flitner, 1889–1990) は、ヴィネケンやゲヘープが教鞭をとっていた時期のハウビンダ校¹⁵で4年間を過ごした学友ツァプスキ (Hans Czapski) とともに、1909年、オーデンヴァルト学校設立に向けた準備を進めていたゲヘープをミュンヘンに訪ねている (vgl. Flitner 1986, 86)。1914年には、オーデンヴァルト学校にツァプスキの妹レニ (Helene Czapski) — その妹エリザベート (Elisabeth Czapski) は1917年にフリットナーの妻となる — を訪ねる。設立4年目のオーデンヴァルト学校は高揚した精神に充ち溢れており、フリットナーはオーデンヴァルト学校で用いられていた教育方法の真髓に心を打たれるとともに、森を散歩する途上で男女共学がもたらす教育効果を説くゲヘープその人にも大いに魅了される (vgl. ebd., 251)。その後、教師になることを決意したフリットナーは官立学校ではなく — 当時のフリットナーに知るところではドイツ田園教育舎ということになるが — 自由学校で職を得ることを希望してゲヘープに雇用依頼の手紙を書くが、学校経営における経済状況の悪化を理由として断られている (vgl. ebd., 250 f.)。部分的にはドイツ田園教育舎のもつ非現実的要素に疑念を抱きつつも¹⁶ 大枠としてはその教育理念に共感をもっていったフリットナーは、『一般教育学 (Allgemeine Pädagogik)』(1950)のなかで、フリッシュアイゼン＝ケーラー (Max Frischeisen-Köhler, 1878–1923) に言及しつつ、「一方では生ける人間のなかに現実を創出し、他方では創出されたものを賛嘆者として同時に楽しむ」(vgl. Flitner 1974, 76 f.) ものとして教育愛を定義し、教育愛が純粹にエロスの愛からは区別されると言明する。

最後に1926年にオーデンヴァルト学校で勤務した経歴をもつボルノー (Otto Friedrich Bollnow, 1903–1991) (vgl. Näf 2006, 239) は、1956年、みずからの前任者であるシュプランガーとともにゲヘープをチュービンゲン大学の名誉教授に推挙したことにかがえるように、ゲヘープと長く親交をもっている (vgl. ebd., 706)。ボルノーの『教育的雰囲気 (Die pädagogische Atmosphäre)』(1956)によれば、教育愛と教育的エロスが決して軌を一にすることはなく、新教育運動において教育愛と教育的エロスを同一視する傾向の存したことは明らかに誤った理解に基づくものであった。ギリシア的な発想から生じた教育的エロスは、ボルノーの目には、その主観性ゆえに、そして賞賛ないしは憧憬をとまなうその偶像化の傾向性ゆえに、教育とは相いれないものとして映る (vgl. Bollnow 1965, 52)。というのも、エロスが愛される存在の完全性に対する崇拜に導かれるものである以上、そこからは教育意志は発生しえない。ギリシア的な愛の概念であるエロス同様、キリスト教的な愛の概念であるカリタスも教育愛の範疇になじまないと考えるボルノーが教育愛の姿として最終的に到達するのは、「素朴な人間愛」(ebd., 54)であり、それはペスタロッチーに表れる「教育者と被教育者のあいだを満たす愛の雰囲気」(ebd.)である。

ゲヘープの教育実践の理解者であるシュプランガー、フリットナー、ボルノーの三者における教育愛の考察から明らかとなるのは、教育的エロスを教育愛と同定して素朴に受け入れることへの警戒である。

¹⁵ ツァプスキの語るハウビンダ校における経験のなかで、教師と生徒が du を使って呼びかける仲間意識で結ばれていることはフリットナーにとってとりわけ大きな衝撃であった (vgl. Flitner 1986, 85)。

¹⁶ ドイツ田園教育舎が自給自足を旨とすること、イギリスの貴族学校を模倣して子どもを親元から引き離すこと、世事に疎くなる環境におかれていることについては、フリットナーにドイツ田園教育舎の魅力を説いたツァプスキ自身もすでに懐疑的な態度をとっていた (vgl. Flitner 1986, 86)。

偶然にも今回の一連の暴行について、ドイツ社会民主党に属する政治家であり 1995 年から 2002 年までノルトラインヴェストファーレン州の文部大臣をつとめたベーラー (Gabriele Behler) は、境界線を堅持することの重要性を強調したうえで、「教育的エロスでなく、教職への職業的エトスが大切」であると説いている (Behler 2010)。

6. おわりに

ゲヘーブはギリシア文化、そしてその権化とみなされるプラトンを西洋文化の源点として高く評価していたが、プラトンの愛ないしは教育的エロスという概念への関心は表明していない。ゲヘーブの教育実践の背景をなす心身論に注目すると、心身の境界線を重視するプラトンの心身論とはむしろ対立していることが確認される。心身の境界線を無化する心身論にたつゲヘーブの教育実践はしかしその作用が絶大である一方、そこから生じる副作用もまた絶大である。すなわち、心身の境界線を無化する心身論にたつゲヘーブの教育実践は、生徒が心身ともに教師への依存を際限なく増幅させるという陥穽に転じる可能性をもっているのである。

しかし、さらに憂慮される陥穽は学校創設者のイメージおよび学校のイメージへの依存とそこから派生するアイデンティティへの依存である。ゲヘーブは自らの放つカリスマ性に自覚的であった。田園教育舎がその設立者個人への一帰依ともいえる一強い信頼に支えられて営まれている現実を受け止めたゲヘーブ (vgl. Geheeb 1933, 9) は、「自らに与えられたカリスマを子どもたちの幸福に使いたい」(ebd., 1) と宣言している。オーデンヴァルト学校に保存されている 61 箱に及ぶ保護者からの書簡を分析したシュタルク (Christl Stark)¹⁷ によると、暴行を心配した保護者あるいは暴行被害を受けた生徒の保護者からの手紙が学校経営陣に学校設立当初から送付されていたが、ゲヘーブが加害者と目される者を擁護したこと、保護者がオーデンヴァルト学校をスキャンダルで貶めることを望まなかったことで一それは近年 (1999 年)『フランクフルター・ルントschau』紙がオーデンヴァルト学校の暴行についての記事を出したときもそうであったが一大きく扱われることなく終息してきた。あのゲヘーブが基礎を築いたオーデンヴァルト学校は連綿と今日まで受け継がれているのであり、伝統あるオーデンヴァルト学校への所属そのものがかけがえのないアイデンティティを保証するものであり、この輝かしい伝統ないしはアイデンティティの抛り所を汚すことは極力回避されるという依存の構図がここに現出するが、その構図こそ暴行を隠蔽するメカニズムを担ってきたと推測される。

街から離れているという地理的条件、心身の境界性を取り払うという教育構想、疑似家族を形成することによって培う共同体感情。ここに生起する依存が暴行を発生させる原因として機能する一方で、暴行を隠蔽する原因は一カリスマ性をもつゲヘーブによって創設され、数多の著名人を輩出し、その高く評価されてきた教育成果ゆえに今日ではユネスコのモデル校¹⁸に指定されている一オーデンヴァルト学校とみずからを重ね合わせるアイデンティティへの依存のなかに横たわっていたといえる¹⁹。

オーデンヴァルト学校の卒業生の一人で現在は司会者そして文筆家として成功をおさめているフリート (Amelie Fried) は、「オーデンヴァルト学校の生徒であったという事実が常に私を他の人々から区

¹⁷ シュタルクは 1998 年にこれらの書簡の分析結果を『保護者の判断にみる一学校の理念と形態 (Idee und Gestalt einer Schule im Urteil des Elternhaus)』というタイトルの博士論文にまとめてハイデルベルク教育大学に提出している。

¹⁸ 現在のオーデンヴァルト学校長であるカウフマンは市長職およびユネスコ職員の経験をもち、2 年半前にオーデンヴァルト学校に赴任している。

¹⁹ 近年の暴行については、母校の名をこれ以上汚したくないという学友の圧力で訴えを躊躇しているケースが多いという (Der Spiegel 15 / 2010, 20)。

別する一方で、すべてのオーデンヴァルト学校の生徒と私を永遠に結びつけている」(Fried 2010) という認識を吐露しているが、これは大多数のオーデンヴァルト学校卒業生に共有されている認識であろう。非常に特殊な共同体に所属していたということから生じる絶対的な信頼、オーデンヴァルト学校にいたことを不変なるアイデンティティと確信する心性。これもまた「心身を含めて」あらゆる境界線を無化することによって生まれた副産物といえるだろう。

* 本稿は平成 22 年度科研基礎研究 (C) 課題番号 21530797 の研究成果の一部である。

<文 献>

- Bartsch, Matthias / Verbeet, Markus (2010): Die Wurzel des Missbrauchs. In: Der Spiegel 29, 40-43.
- Behler, Gabriele (2010): Lehrer müssen nicht geliebt werden. In: Die Zeit vom 23. September.
- Bollnow, Otto Friedrich (1965): Die pädagogische Atmosphäre. Untersuchung über die gefühlsmässigen zwischenmenschlichen Voraussetzungen der Erziehung. Heidelberg: Quelle & Meyer.
- Bueb, Bernhard (2010): In weiter Ferne oder zu nah. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 16. März.
- Fichte, Johann Gottlieb (1755 / 1807-08): Rede an die deutsche Nation. Hamburg: Felix Meiner Verlag.
- Fischer, Julia (2010): Rede zum 100. Geburtstag der Odenwaldschule. Odenwald. Ms.
- Flitner, Wilhelm (1974/1950): Allgemeine Pädagogik. Stuttgart: Ernst Klett Verlag.
- Flitner, Wilhelm (1986): Erinnerungen 1889-1945. Paderborn: Ferdinand Schöningh.
- Fried, Amelie (2010): Die rettende Hölle. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 14. März.
- Gassner, Helga (2008): Odenwaldschule (1929-1935) . In: odenwald schule. OSO-HEFTE. Neue Folge 19. Die Odenwaldschule in der Weimarer Republik, 163-177.
- Geheeb, Paul (1909): Brief vom 20. 09. 1909. An das Kultusministerium des Großherzogtums Hessen-Darmstadt. In: Geheeb, Paul: Briefe. Mensch und Idee in Selbstzeugnissen. Hrsg. von Walter Schäfer. Stuttgart: Ernst Klett 1970, 61-64 & 76-87.
- Geheeb, Paul (1913): Koedukation als Lebensanschauung. In: Mitarbeiter der Odenwaldschule (Hrsg.): Erziehung zur Humanität. Paul Geheeb zum 90. Geburtstag. Heidelberg: Verlag Lambert Schneider 1960, 116-127.
- Geheeb, Paul (1924): Die Odenwaldschule. Geistige Grundlagen. In: Mitarbeiter der Odenwaldschule (Hrsg.): Erziehung zur Humanität. Paul Geheeb zum 90. Geburtstag. Heidelberg: Verlag Lambert Schneider 1960, 154-164.
- Geheeb, Paul (1931): Die Odenwaldschule im Licht der Erziehungsaufgaben der Gegenwart. In: Mitarbeiter der Odenwaldschule (Hrsg.): Erziehung zur Humanität. Paul Geheeb zum 90. Geburtstag. Heidelberg: Verlag Lambert Schneider 1960, 131-154.
- Geheeb, Paul (1933): Brief an Eduard Spranger vom 9. August.
- Grunsky, Hans (1960): Erinnerungen an die Anfänge der Odenwaldschule. In: Mitarbeiter der Odenwaldschule (Hrsg.): Erziehung zur Humanität. Paul Geheeb zum 90. Geburtstag. Heidelberg: Verlag Lambert Schneider 1960, 43-50.
- Herrmann, Ulrich (2010): Vor 100 Jahren wurde die Odenwaldschule gegründet. Anfang und Erfolge, Krise und Zukunft eines „pädagogischen Laboratorium“. Odenwald. Ms.
- Huguenin, Elisabeth (1926): Die Odenwaldschule. Weimar: Hermann Böhlhaus Nachfolger.
- Kaube, Jürgen (2010): Ein „Sehr gut“ in Erotik. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 16. März.
- König, Eugen (1989): Körper - Wissen - Macht. Studien zur historischen Anthropologie des Körpers. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- Kroner, Dodo (2008): Erinnerungen an die Odenwaldschule (1929-1932). In: odenwald schule. OSO-HEFTE. Neue Folge 19. Die Odenwaldschule in der Weimarer Republik, 157-162.
- Ladenthin, Volker (2010): Geschichte als Herausforderung. Zur Zukunft des reformpädagogischen Ansatzes der

- Odenwaldschule. Odenwald: 2010. Ms.
- Lietz, Hermann (1970 / 1898): Die Erziehungsgrundsätze des Deutschen Landerziehungsheimes von Dr. H. Lietz bei Ilsenburg im Harz. In: Schulreform durch Neugründung. Ausgewählte pädagogische Schriften (besorgt von Rudolf Lassahn). Paderborn: Schöningh.
- Mann, Klaus (2000 / 1967): Kind dieser Zeit. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt.
- 三浦雅士 (1999) : 考える身体 NTT 出版
- Näf, Martin (1998): Paul Geheeb. Seine Entwicklung bis zur Gründung der Odenwaldschule. Weinheim: Deutscher Studien Verlag.
- Näf, Martin (2006): Paul und Edith Geheeb-Cassirer. Gründer der Odenwaldschule und der Ecole d'Humanité. Deutsche, Schweizerische und Internationale Reformpädagogik 1910-1960. Weinheim / Basel: Beltz.
- Nietzsche, Friedrich (1968 / 1883-85): Also sprach Zarathustra. Ein Buch für Alle und Keinen. In: Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe (Begründet von Giorgio Colli / Mazzino Montinari). Sechste Abteilung. Erster Band. Berlin: de Gruyter.
- Oelkers, Jürgen (2010): Was bleibt von der Reformpädagogik. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 16. März.
- Oelkers, Jürgen (2010 a): Reformpädagogik. Ein deutsches Schicksal ? Wuppertal. Ms.
- Oelkers, Jürgen (2010 b): Eros und Herrschaft. Ein anderer Blick auf die Reformpädagogik. Bielefeld. Ms.
- Oelkers, Jürgen (2010 c): Reformpädagogik und Landerziehungsheime. SWR. Ms.
- プラトン (2002 / 1952) : 饗宴. 東京 : 岩波書店
- Roten, Michèle (2010): Die Schule als Lebensgemeinschaft. In: Das Magazin vom 12. Juni.
- Schäfer, Walter (1960): Paul Geheeb. Mensch und Erzieher. Stuttgart: Ernst Klett.
- Schmoll, Heike (2010): Die Herren vom Zauberberg. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 14. März.
- Schultz, Tanjev (2010): Männer, die zu sehr lieben. In: Tages Anzeiger vom 14. März.
- Spranger, Eduard (1922 / 1914): Lebensformen. Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der Persönlichkeit. Halle: Verlag von Max Niemeyer.
- Stark, Christl (1998 / 2010): Idee und Gestalt einer Schule im Urteil des Elternhauses. Eine Dokumentation über die Odenwaldschule zur Zeit ihres Gründers und Leiters Paul Geheeb (1910-1934). Heidelberg. Ms.
- Venn, Arthur (2008): Erinnerungen an die Odenwaldschule (1923-1925). In: odenwald schule. OSO-HEFTE. Neue Folge 19. Die Odenwaldschule in der Weimarer Republik, 80-101.